

いかに私たちは生活領域

中谷健太郎

二〇年以上の間、私たちは大分県「一村一品運動」の周辺にいた、と思う。「周辺」にいたのであって、「真ん中」にいた、という意識はない。「周辺」にいなから「町の経済」はぐんぐん伸びた。九州東部のひなびた温泉「湯布院」の名前は、二〇年の間に「全国レヴェル」になった。その間何をしたか。「町の中」から「町の外」に向かって「自慢情報」を発信し続けた。それだけだ。その結果、「町の外」から「町の中」に向かって財貨が入ってきた。「町の中」の「市場」が膨らんだ。それが「町民所得」と「町の財政」を押し上げた。湯布院町が「一村一品運動の優等生」と言われる所以だ。

もうひとつ優等生と呼ばれる町がある。大山町だ。「梅・栗植えてハワイへゆこう」。農業協同組合の呼びかけで増産された農産物が「町の中」から「町の外」へと向かった。「町の外」に「市場」が生まれた。それが大山町の経済を支えている。

「町の外」の力を引つ張り込んだ「湯布院町」は「一村一品運動」の「周辺」にあり、「町の中の力」を移出した「大山町」は運動の「真ん中」にいた、と思ってきた。しかし間違っていたようだ。「真ん中」にいたのは「県庁」であって、「町々村々」はいずれも運動の「周辺」にいたのではないか。そう思わなければ「一村一品運動」の謎は解けない。つまりこうだ。「町々村々」は「県庁」が発信する一村一品「渦巻き運動」の「円周線」にあつて、それぞれに「内発的な運動」を展開してきた。

「県庁」に直結して同じ「渦巻き運動」をなぞってきたわけではない。町を支える「経済市場」を、町の「中」に造ろうと、「外」に造ろうと、そんなことはどうでもいい。問題は「町」が内発的な「自律力」を失わないでいるかどうかだ。

その「自律力」を突然、湯布院町は失ってしまった。一年前の一〇月一日、国が強行する「市町村合併」施策に呑み込まれて「由布市」の一部にされてしまったのだ。町の「自治権」は消えた。

県は、一村一品運動の「円周線」に活動する「町々村々」の内発的な「自律力」を、自分の運動の「成果」と見誤つたのではないか。運動を受け止める「末端自治体」を大きくすれば、「受け止める運動量」も大きくなると。「自治権」を失つた「町々村々」は「禁治産者」だ。「一村一品運動」の担い手どころではない。ならば尾っぽを巻いて、この町を逃げ出すか。とんでもない。「市町村合併承知」。これからが正念場だ。

ようやく見えてきたぞ、「生活領域」の風景が。「行政領域」とは別の「生活領域・由布院盆地」。豊後富士・由布院の麓に広がる、水清く、緑濃く、田んぼが光る、温泉が湧く「盆地」。鰻、スッポン、鴨が美味しい「由布院盆地」という名の「生活領域」、そこに新しい「一村一品運動」を打ち立てよう。

(なかや けんたろう／亀の井別荘代表)